

あから がしら

杉原信幸 × 中村綾花

Nara Prefecture
Historical and Artistic Culture Complex



なら歴史芸術文化村

滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR

ドキュメント 2023



Artist in Residence Documents 2023

Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex

なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR 2023

杉原信幸 × 中村綾花 あからがしら

滞在期間 2023年 9月12日～10月10日（リサーチ期間）
2023年 11月10日～12月10日（制作・成果発表期間）

成果発表展 会場① なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F 交流ラウンジ

会期：2023年12月1日～12月10日

会場② 山の辺みづえ画廊（桜井市）

会期：2023年12月7日～12月9日

あからがしらの舞

2023年12月10日

会場：なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F 交流ラウンジ

〔事業にご協力いただいた皆様〕

朝岡工房／荒磯町自治会の皆さま／NPO法人原始感觉舎／

株式会社 吉野森久銘木店／Café samanala garden PIZZA Arcobaleno／小関 吉浩／

桜井市立埋蔵文化財センター／信夫貝釦製作所／田村絵画・立体教室／天理大学雅楽部／

奈良県文化財保存事務所／野本 崑房／紅じで踊り保存会／夜都岐神社（敬称略50音順）

着物を提供してくださった方々

手縫いワークショップに参加してくださった方々

主催：なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会

（なら歴史芸術文化村・天理大学・天理市・桜井市）

滞在記録

2023
9.13 水

黒塚古墳
天理市立黒塚古墳展示室
崇神天皇行燈山古墳
伊射奈岐神社
唐古・
鍵考古学ミュージアム

埴輪のうつろは使役する人たち、国や戦いがはじまり、ただそれぞれが生きることに真摯に向き合う縄文から、支配や秩序によって配分され生きることにシフトした時代への変化、支配される人たちのうつろが埴輪のうつろと重なるよう。米という文化、ネズミから守るのに米を高床の倉庫に貯蓄すること、高貴なもの大切なものを高いところへ、家が大地から離れること、大陸から船で渡ってきた人たちの、船＝鳥の文化。鹿・スッポン・魚を神聖視していたそう。

前方後円墳のこと、円が墓所＝子宮、甦り再生の力のこと。方は祭壇かゲートか、○は女、△は男でひとつになり再生の場としているのか。レプリカだけど黒塚古墳の石積のべ



(田原本町教育委員会所蔵)



(資料協力: 天理市教育委員会)

ンガラの赤が印象的、赤は今回重要、鉋ガラを赤く染めて制作につかったら面白そう。祭祀をする女シャーマンの線刻、衣装が鳥。日本の着物のたもとも鳥を祀ることの名残なのが。

奈良は建物の高さ規制が厳しいそう、低山でもそこに山があるのがよくわかる。家の屋根も多くの家は揃って黒い瓦。色の規制もあるのか、それが奈良の人はうつくしさの集合的な感覚を大切に感じられる素地がまだ失われていないかもしれない。〈綾花〉

文化村の交流にざわい棟で販売されていた御神酒口（みきのくち）が美しく、とても気になる。〈杉原〉

2023
9.14 木

安堵町歴史民俗資料館
奈良県立民俗博物館
生駒ふるさとミュージアム

安堵町でつくれられる蠟燭の芯、灯芯。蘭草の韆でつくれられているのは驚き。不思議な素材感。蘭草のガラからつくれられる工芸的なものもうつくしい。蘭草の筆

民族博物館の展示がおもしろい

・豊作を祈願する野神祭のひとつ、わらで蛇をつくる蛇巻き（田原本町・鍵）という行事、藁で巨大な蛇（龍）をつくり子どもたちが担いでハッタンと呼ばれる場所まで練り歩き神木に胴体を吊り水に恵まれるように祈願する。

・オハケ、御仮屋

神社から神様をお迎えする、依代となる一時的な社で当屋の家につくる。

・奈良にため池が多いのは降水量が少なくて水利が大変であったこと、一方で渓谷地帯では深刻な水害もあった。高田のいのこ祭りのお仮屋がおもしろい。

生駒の地域の方々からの昔話を収集してまとめた資料は細やかでおもしろい。こうゆうのしつかりと残すのは面白いし大事（綾花）



（右2点：奈良県立民族博物館所蔵）



（田原本町教育委員会所蔵）

2023
9.15 金

奈良県庁
夜都岐神社
竹之内環濠集落
佐保庄素戔鳴神社
大和神社
春日神社

県庁に挨拶に行つたあと、自転車を借りて文化村の周りを巡る。文化村から近い夜都岐神社で古木の切り株を見つける。その存在が気になつて神主さんに頼んで彫刻するためにつだく。

無人販売所の休憩所、せんぎりや、お茶のふるまいまである。柿などを買う。竹之内環濠集落、佐保庄素戔鳴神社、大和神社、春日神社を巡る。文化村周辺には杉板の古民家がたくさんあり、しゃもじを玄関に飾つていたり、伝統的なまちなみが残つている。地区の入口に共同作業スペースのような場があるのもおもしろい。果樹園のちょっとした辻などにお地蔵さんや石があり、歩いたり、自転車で巡るのがとても楽しい。そこかしこにある古墳もそうだけど、それは土地の記憶の痕跡であり、それが残つてることによつて無意識にひらかれる豊かさ。〈杉原〉



2023
9.16 土

いただいた着物をといて布に戻す。着物の裏地がおもしろい。奈良ならではの銅鏡と勾玉の柄こんなのが初めて見た。夕方情報発信棟のフリーピアノを弾いていると、ふと気付くと若い兄さんが聞いている。順番を待つてているのだと思い話しかけると自転車でずっと旅をしているという。旅の話で盛り上がっているとなんと東京藝大的学生さんとのこと。首席で卒業したそう。マレーシア出身なのだろう。去年一年間そのあたりを旅していたのですごく盛り上がる。待ち合わせをしていた奈良在住で東京藝大卒の友達も合流しアトリエに来てもらつてお話を。これから奈良で拠点を探したいみたい。こどもにアートを教えることなどしているよう。〈綾花〉

2023
9.18 月

都祁山口神社
西山古墳
春日神社
市座神社
白山神社
厳島神社

自転車で文化村の周りを巡る。ため池の鈍く底光りを放つみなもに包まれた西山古墳を覆う草が、風に靡いている、豊かな膨らみ、獣の肢体を覆う毛が靡いているような、あからがしらの身体のイメージが立ってきて、腑に落ちる。

このような古墳がそこかしこにある奈良ということの、日常の無意識に差し込まれる緑の膨らみの豊かさについて。市座神社の境内に青石橋という2つの穴の空いた大きな板状の石が石の棒に支えられて立っていた。立札を読むと、布留川の橋に使われていた石で、2つの穴は馬が踏み抜いたという言い伝えがあるが、古墳の石棺の蓋石だった。

都祁山口神社、春日神社、白山神社などを巡り、白い鳥の羽根を拾い、厳島神社の石がたくさん祀つてある在り方と鬼子母神の祠の神像がうつくしい。境内に磐座があつたり、一つ一つの神社に何かがある。さすが天理教の生まれた土地である天理。〈杉原〉



2023
9.19 火

笠山荒神社
檜原神社
桜井市役所
三輪流両部神道心道教社
石寸山口神社
八幡神社
桜井市長表敬訪問

桜井市役所に行く途中、笠山荒神社の看板を見つけて笠山荒神社に行くが、峠道をはしつてもなかなか着かない。ようやく辿り着くと神社の前に蕎麦屋があつたが、行列していく時間がないので、神社を見てから峠道を戻る。

大神神社と同じ本殿のない原始的な形態を残す檜原神社を見てから、三輪の参道のおいしい巻きずしを買って食べてから、桜井市役所を訪問。市長さんに市庁舎の屋上から、桜井市の説明をしてもらう。それから桜井駅前から歩いて、三輪流両部神道心道教社、石寸山口神社、八幡神社を巡り、帰つてワークショップの準備をする。〈杉原〉



2023
9.20 水

勝手神社
宮堂町

あからがしらの行事を行なう勝手神社を見てから、あからがしらの行事の話を区長さんと神主さんに聞く。さらに川下にある二階堂地域では今でも浸水がおこり、洪水の記憶が残っているという話を聞いて、実際に訪れると、洪水時に閉める水門があり、隣の宮堂地域には、土壠と木の板を差し込んで、水の侵入を防ぐ石が残っていた。宮堂には古い町並みが残っており、樋の形が印象的で、塀の屋根瓦には大黒様がいた。塀の上にある名前のない神社を見ると、そこの社には不思議な形の石が納められていた。それはもしかしたら、猪の頭部のように見えるかもしれないと思つた。〈杉原〉



10

2023
9.21 木

天理市役所
天理市長表敬訪問

天理市役所を訪れ、天理市長に会うが、一瞬、秘書の人かと思ったら、若い市長だった。ほぼ同年代で、歴史文化に造詣が深く、話がおもしろかった。その後、パルクさんとチラシのことなど打ち合わせ。〈杉原〉



11

『食』というのは『わたしのもの』になるものなので、各地で滞在制作をする時も、その土地の食材で自炊をして食べることとなるべく大切に楽しんですごしているのですが、スーパー・マーケットに行くと土地ごとに特色があつたりしてとてもおもしろい。

奈良はどんななかんじかなあと、地元のスーパー・マーケットをまわると、どうも魚がすごく充実している。長野とおなじ海なし県のはずなのに驚くようなものが並んでいます。

お刺身用のツバスは300センチはありそうながら半額だと200円でお釣りがきちゃうし、赤エイの肝つて？50円つて？え？

今回はキッチン設備のない火気厳禁の滞在先に暮らしているので、自炊のできるよう、台湾で入手した炊飯、蒸し、煮込み、1台で同時調理もできちゃう「大同電鍋」に加えて、

電熱コンロ、まな板、包丁、箸、お椀、おたま、フライパン、最小限の調理器具を持参しているので、洗面台の小さなカウンターでも快適にツバスを刺し身におろし、赤エイの肝を日本酒で臭み抜きして甘じょっぱい煮付けにしていただきます。

赤エイの肝、50円だし、エイはアンモニア臭とかいうし、どうかなーと思っていたけれど、コレがものすごく美味しい！こつくり濃厚でとろける舌触り、後味の独特の臭みも、いかにも珍味といった美味しさで日本酒と相性抜群。朝からお粥に添えてちびちびいただぐのも美味。

50円でなんと3匹分も肝が入っていたので、翌日のお昼には煮付けにしておいたエイ肝を使って、信幸さんがエイ肝とゴーヤの素麺炒めを創作料理してくれたのですが、コレが想像できなかつた笑っちゃう味。オリーブオイルで炒めたエイ肝がとろけて麺に絡まりカルボナーラのようなクリームパスタ風に。エイの臭みとゴーヤの苦みが不思議と打ち消し合うのか高め合うのか、とにかくマッチして謎に美味しい。

しかし、何故に海なし県なのに、こんなにも魚に強いのか？〈綾花〉

2023
9.22 金

桜井市立
埋蔵文化財センター

桜井市立文化財収蔵センター

橋本所長のお話のなかで、ホノケ山古墳にお産のときの胞衣を埋める場所があつたそう。出産習俗に興味があるのでこうゆう話はうれしい。えなやぶよのやぶと地域の人は言つていたそう。

最古の茅原大墓古墳出土盾持人埴輪の表情が呪われそうなうつろの顔で怖い。時代があたらしい盾持人埴輪も近くに展示してあるが全然違つて面白い。あたらしいのはゆるキャラみたいでぜんぜん怖くないこれじや墓守はできなさそう、劣化がはげしい。和歌山に通じる魚(いよ)の道の話を聞く。熊野灘に面した三重県の大紀町錦から県境の高見峠を越えて、都である大和に魚が運ばれた「魚の道(いよのみち)」と呼ばれる街道があつて、大昔から近代の終わり、鉄道ができるまでは奈良に魚を運ぶ歴史的な街道が活躍していたのだそう。〈綾花〉



2023
9.23 土

大和神社
朝岡工房

紅しで踊り

コロナでまつり事なども4年ぶりに今年は開催、なんていうところも多い。ただでさえ後継がおらずに地域の伝統文化がどんどん先細りになっているときに心底厄介な疫病騒ぎの数年だった。大和神社のしで踊りは古くは雨乞いのため男性の行なっていたものだったそう。うたの詞のなかにもよく聞くと、修驗道に雨乞いを教わったみたいなことが歌われる。「てんつくてんつくてんつくつく」天をついて雨を降らせる。その後染色をやっている朝岡工房さんを訪ねて、杉の葉染めに使う大鍋をお借りする。

〈綾花〉



2023
9.24 日

手縫いワークショップ

天理教の御守 紅絹の三角

文化村の手縫いワークショップに立ち寄ってくれた方がたくさんの着物を縫いつないでいるのを見て話しかけてくれた。着物の裏地にはしばしば紅絹のうつくしい赤色が使われていて、わたしはこれが大好きなのだけど、その方は紅絹を見て、天理教の御守はおやさまの着ていた着物の紅絹の小布なんですよと教えてくれた。一生に一度だけもらえるとても大切な御守なのだそうだ。見てみたいと言つたらいいですよと見せてくれて、三角形に縫われた紅絹の小布を出してくれた。地域に根ざした信仰のかたち。とても興味深い。〈綾花〉



2023
9.25 月

手縫いワークショップ

安藤榮作さんが友人の方とあからがしらの布を縫いに来ててくれた。長野でやつてる原
始感覺美術祭に参加していただき、作品はもちろん人柄もすっかり安藤さんのファン
になってしまった。はじめて顔を合わせてお話ししたときから、なんかぐいぐいと
デイープな話へ互いに走ってく感覺があつておもしろい。文化村から安藤さんのお家
は近いこともあって、制作の忙しい合間を縫つて何回も顔を合わせることができてと
てもうれしい。安藤さんの手縫いは彫刻するような粗々しい立体的な縫いあと。人それ
ぞれ本当に個性が出る。

きのう夕暮れ時に自転車でおもしろそうな石を辿つて適当に走っていたら、田んぼの
景色の中になぜかパイワン族の伝統的な石造りの家屋を発見し衝撃をうける。金網に
囲われ農家さんの土地っぽかったので午前中に再訪し、作業をしていた方に声をかけ
お話を聞く。天理高校の農事部の活動場所だそう。なかを見せていただくと本物のパイ
ワン族の彫刻もあり、内部まで再現されていて驚く。〈綾花〉



2023
9.26 火

天理教本部

天理教の神殿見学へ。神殿の中心に建てられたカンロダイという石に向かい祈るとい
うことを探しておらずとも興味があつたのでうれしい。午前中行くとあまりの人の多
さにとても中心の石のところへ行けるような感じではなく、ぐるりと神殿の中を歩き
早々に退散。夕方自転車で出鱈目に周辺を走り回つて散策をしていたらいつのまにか
朝来た神殿のそばにきており、改めて中に入る。祈りの所作、うたいながらの手の舞。祈
りのうたの音程も早さも、その人それぞれ違つていて、空間の中にはらばらに始まつた
うたが不思議と響き合つてとても心地いい。あんまりにいいのでそのまま一小時間す
ごしていると日が沈んできて夕日の赤い道が神殿の中にできて驚く。その中に長く伸
びた祈る人の影がとてもつくしい。数日前に秋分だったからのかわわたしのいた場
所が良かつたからのか石のちかくに日の落ちて赤色に染まる神殿は圧巻だった。す
ごいものが見れた。〈綾花〉

三輪山にのぼる。山歩きは靴を脱ぐほうが足の裏の感覺がよくわかつてすきなので裸足で歩く。裸足で歩くために整備しているのかと感じるくらい歩きやすくてとても気持ちいい。ひとりだけ途中すれ違った白装束の方は裸足で歩いていた。小さな川のながれと一緒に登っていく、なるほど蛇のお山なわけだ。三輪山は山 자체が御神体。「さきみたまくしみたままもりたまえ さきわえたまえ」三輪の巳さんは三輪のお山を七巻半しているのだそう。

文化村で出会った山の辺みずえ画廊・田村さんのお宅へ、長野だつたら文化財指定されているんじゃないかなと思うような建物。昔は紺屋を営んでいたそう。今は農業用水路として使用している水路に染めた布をさらせるよう降り口が組まれていたり、藍瓶を置いていた土間の高い天井には火が落ちていなか確認するための小窓があつたり、ふつうの民家とはおもえないものすごいふつとい梁がかっこいい。二階にあがらせてもらうと船底天井という内側が柔らかな曲線を描く造り、はじめてみた！すごい。やはり家と船のイメージは重なりあつて。重たい瓦屋根の家で眠ると重力なのかよく眠れるんですよと話してくれた。船底を見上げ水底に揺蕩うような深い眠りを妄想してしまう。五月のお節句の手描きの古い旗を見せてもらう。わたしの家は長野のなんてうつとり。

ことない家だったけど小さい頃は5月になればどこの家でも男の子がいれば節句の大きな長旗をたてていたけれど、最近はそんな景色もとんと見なくなった。鯉のぼりもふつうの家にふつうにでっかいのがゆうゆうと空を泳いでた。祝日とともに、ふつうの民家がふつうに小さい日の丸の旗を玄関口にさしていったのも、今は全く見なくなった。自国の国旗を一般市民がなんとなしに避ける？のような共通心理のある国も珍しい気がする。〈綾花〉

桃尾の滝

長野にいた時からとつておきの場所があると聞いていた滝へ安藤さんに案内してもらいう。到着したら滝のほうからとても気持ちの良い風がひゅーんと吹いてきて、安藤さんが、お二人のこと歓迎しますねとお話してくれてとてもうれしい。3人で滝の周辺を散策。薄暗くなりではそろそろと安藤さんと別れ、しばしそのままわたしたちは滝のそばに。滝のうえのほうまで歩き川の水に全身浸かる。〈綾花〉



天理参考館にて、台湾原住民の研究をしている学芸員の早坂さんの話を聞く。アイヌ資料、韓国の民俗資料、パプア・ニューギニアの資料、台湾原住民パイワン族の蛇を象った民具、このパイワン族の蛇のイメージが、台湾との縁の始まりであり、天理との縁も繋いでくれた。チベットの豚の皮を浮きにした舟がおもしろかった。天理の縄文土器も見ることができたが、西日本で見る縄文土器の中ではしっかりと形を持っていた。岩手県の亀形土製品や鹿角製品や石枕、オリエント資料など、とにかく見どころ満載で、一度は訪れるべき場所。

奈良市埋蔵文化財調査センターで、亀甲形陶棺の企画展を見る。その後、宮堂を再訪し、村で一番の長寿のおばあさん101歳の方に話を聞いたが、無名神社のことを『どうづかさん』と言つてたが、祠の石の由来はわからず、あからの伝承は失われていた。女の人が集まつて念仏を唱える祭りがあつたらしい、塚の下には、とても凄い人が眠つてているという話だった。おばあさんが小さい頃には、洪水で屋根の軒まで水が上がり、船でおにぎりを運んできてくれたという話を聞かせてくれた。洪水の記憶が残る地域にあからがしらの伝承が生まれたことを実感することができた。〈杉原〉

2023
10.4 水

飛鳥坐神社
奈良文化財研究所
飛鳥資料館
明日香民俗資料館
酒船石
石舞台古墳
明日香村埋蔵文化財
展示室
益田岩船
奈良県立橿原考古研究所
附属博物館
歴史に想う橿原市博物館

飛鳥坐神社にて、陽石と陰石がそこかしこにある。明日香は原初の信仰を残している。

奈良文化財研究所飛鳥資料館にてキトラ古墳の玄武の壁画の複製を見る。産直で明日香の野菜を買って、隣の明日香村埋蔵文化財展示室を見る。明日香民俗資料館で藁の男根と女陰を象った榎原かんじょうかけを見る。おもしろい祭り。いつか見に来たい。

〈杉原〉

リサーチに出たときはだいたい地場野菜の買える直売所で野菜を買う。奈良に来てから色々な直売所をまわったけど、どうも伝統野菜みたりのが他県より沢山置いてある感じがする。しかも、どうだ！って感じじゃなくてごく自然に当たり前に並んでいる感じがとてもいい。多様性がある売り場は本当に豊かだし買い物もたのしい。

奈良はどうやらオクラの種類がとても豊富なところみたい。見たことない品種が沢山出回つてたのしい。オクラすき。ネバネバは身体に良い。〈綾花〉



北村さんの知人の方に杉の葉を頂き、吉野に行き、東吉野村民俗資料館で足袋の底に刺し子を施したものや千人針などを見る。U字状に切り取られた赤い布がかかった社と舞台のようになつた神社にきちんとくせいの花がたくさん落ちていて美しかつた。その匂いも。

丹生川上神社を見てから、文化村の調理室を借りて杉葉を細かく切つて、鍋で煮て、染色液をつくる。文化村に近いピザ屋さんから粗穀の灰を頂き、灰と水を混ぜた上澄み液を、杉の葉を煮だした液に入れると、液が濁った緑色から赤く変わる。

初めての草木染だったので、試しに、白いあからがしらの布に刺し子をしたものに指で液を塗りつけると、木の精のような色が布を染めていく。杉の皮の橙色。あからがしらが川すじの野のものを食べ尽くしてしまつたというのが、洪水で流された杉の木の皮が濁流となるイメージと猪の毛なみを重ね見たのではないかということ。6月に行つたカナダの先住民調査で見たクワキウトル族の儀式で、杉の皮で作つた縄を上裸に纏つた子どもの舞が、相撲の儀式と似ているように感じたことと繋がつており、あからがしらの布とたてがみに、野生の色を籠めたかつた。〈杉原〉



2023
10.6 金

桜井市役所にて、入つてすぐのガラス張りで吹き抜けの気持ちの良い空間で鮮やかな着物を広げていると沢山の人が興味を示してくれる。縫い物なんて家庭科の授業以来だと言う男性がこんなに自由にやつても良いならたのしいですね！と、たのしくお話をしながら一緒に手縫い。その人それぞれの縫い跡に個性が宿つて本当におもしろい。縫い物をほとんどしたことない人も、大雑把な人も、几帳面でも、それぞれがまじりあって一枚の大きな布のなか、気付くといい味になつてる。

文化村の設備担当の方に、奥さんが友達に声をかけてくれ集まつたと開始直後から着物をたくさんお持ちいただいた。その持ち主の方も、私の家からだとここなら来やすいからと手縫いをしにきてくれた。みんなで縫うのはたのしい。縫つていると、着物から引つ張り上げられてくるお話がおこりやすい、でも集中して黙つていてもいいし、またぼつりぼつりと誰ともなく話し始めたり。なんというか間合いがちょうど心地よい感じになりやすくておもしろいなと思う。

村長が差し入れをしてくれた観音プリンがものすごくおいしい。観音プリン。名前もすごくいい。村長はおいしいものをしつてる。〈綾花〉



2023
10.7 土

勝手神社

天理☆みりょく発見!
~Be a time traveler~
作品でアーティストと
交流してみよう

天理の小中学生が自分でしらべたこの土地の素敵なことを教えてくれるという。石上神宮の鏡池にいる天然記念物のワタカという魚の話とか、自分で歩いた山の辺の道の話とか、たのしく聞いていたらなんと市長が突然登場。天理の並河市長はわたしより少し年上くらい、高齢男性ばかりの日本の政治家の中ではかなりお若い。市長の話はすごくおもしろくてあつという間に市長オンステージになる。気になっていた石上神宮のみたまふりの神事についても話に出てきて、これは行かねば!とわくわく。小学生男子が僕今度市長に肩車してもらお!って言つて、そんなふうに思わせる市長つてめっちゃいいよなとおもつた。〈綾花〉

2023
10.8 日

門僕神社
往馬神社
櫟原オハキツキ
ギャラリー勇斎
奈良豆比古神社

門僕神社の曾爾の獅子舞を見に行く。曾爾の獅子舞の荒舞はひねりの回転が力強く、山深い地域には、芸能が確かに息づいているのを感じた。また、ひよっとこ面の男が、子どもを攫つては、一緒に踊らせたりするのだが、子どもが本気で泣き叫んで、両親に助けを求める。これは村の子どもだけを選んでやっていると思うが、泣かされた子どもを親が抱きしめてあげることで、地域の連帯が生まれる。ナマハゲのような芸能が生きていた。また天狗面や花笠の面が沢山出てくるのも珍しかったが、最後に、それらが獅子と繋がつていると感じた。生駒の火祭りに移動し、火をつけて走るシーンを見た。その後、櫟原オハキツキを見に行つた。当屋さんの個人宅でやつてあるが、野本さんに神社からすぐの家という情報を聞いていたので、見せてもらうことができたが、杉の葉で覆われた素晴らしい。当屋の奥さんと少しお話してから、安藤榮作さんの奥さんと娘さんの展示を見に、ギャラリー勇斎に駆け込み、安藤さんたちにお会いする。その後、奈良豆比古神社の翁舞を見るが、古い翁舞の映像とはかなり変わっている印象だった。町場で文化を維持していくことの大変さを感じた。〈杉原〉



25



24

2023
10.9 月

かんながらを杉の葉で染める

文化村の修復工房の技術者さんからいただいたうつくしいかんながらを吉野杉の葉で染める。杉の青葉を煮出して草木灰で赤色が出る。あからがしらのたてがみの色。大鍋でグツグツ葉を煮出していくのは魔女みたいでごくたのしい。かんながらを染め、着物をといた裏地を染め、布地を染め、とても良い色が出た。草木染めをちゃんとやるのは今回がはじめてだけとてもおもしろい。あの青い杉の葉で赤色い色に染まる不思議。これからどんどんやつていきたい。〈綾花〉



2023
10.10 火

桜井市役所
笠山荒神社
檜原神社
三輪流両部神道心道教社
石寸山口神社
八幡神社

杉の葉染めをした鮑がらをスタジオの窓際に吊つて干す。窓からの光を透過して飴色の鮑がらが空調に揺られている姿が美しい。これをたくさん部屋中に吊つて風に揺らいでいるだけでも、川の流れのなかにいるような美しいインスタレーションが生まれるだろうというイメージが立つてくる。〈杉原〉



2023
11.10 金

キトラ古墳
奈良文化財研究所
飛鳥資料館
奈良県立美術館

滞在制作の後半1か月がはじまる。地域の方々に呼びかけ、あつまつた沢山の着物を一針一針ちくちく手縫いで縫いつなげ『あからがしら』をつくる。赤子の健やかな成長を願い着物の背に縫目をいれる『背守り』や出征兵士の無事を祈る『千人針』のように、人は古来より『縫う』という行為そのものに呪術的なものを内包させてきたのだと思う。

〈綾花〉

キトラ古墳の特別公開の玄武を見に行く。陰と陽のつがいのような。招待券を頂いた奈良県立美術館で企画展『仮面芸能の系譜』を見る。すばらしい古面をたくさん見た。新しい面も展示されていたが、その落差に驚く。表現は生活から生まれるので、神や精霊を身近に感じられるような生死や自然の狭間に生きる生活と、現代の都市化され、均質化された生活のどちらが人生として豊かであったか、考えさせられる。古面も作られた当時は清新しく、時の流れが古色として宿っているとしても、その造形の持つ空間の鋭さ、生の生々しい鋭さは圧倒的だ。このような生き方をどのように現代に呼び出せるかについて思う。〈杉原〉

2023
11.11 土

だれもが
みんなアーティスト
ワークショップ参加

城下さんのVRで空間にお絵かきするワークショップを体験させてもらう。自分と遠い世界なのでわくわく。ゴーグルをかぶって、手の機械を握ると空間に立体的に線が引ける。描く事 자체も面白いんだけど、ゴーグル取った瞬間なんにもないってところがいちばんおもしろかった。なくなるって勿論わかっていても、今見てて、描いていた、あつたのが、ないになる、脳がはじめての感覚に衝撃を受けてるのがおもしろかった。夢とうつつ。頭にかかることでその世界と接続するおもしろさは仮面を纏うこととも親しいところがあるかもしれない。空間に3次元的に描けるおもしろさは、外野で見ていても作るのない空間への表現は舞にも通じているようなおもしろさがある。〈綾花〉



長野から原始感覚美術祭の仲間が縫いに来てくれた。祭りのときは忙しくてこんなふうに縫いながらひたすら話をする時間なんて取れないからとも新鮮。

大町から赤子連れの御夫婦と一緒に友人が手縫いワークショップをしに来てくれた。お年寄りってどんどんと色素が薄くなつて肌も透けるような幽霊みたいな透明なうつくしさがあるなと思う時があるけど、赤子は内側から光つてゐみたいな肌感だなと改めて感心する。来たばかりの人と、これから行つてしまふ人、ひかりとちかしい。

京都から来た織維関係のお仕事をされているという老紳士。山高帽に蝶ネクタイいかにも仕立ての良い背広がとてもお似合い、あんまりに素敵な出で立ち。張り巡らせた着物をたのしんでみてください、僕はどれがどの年代の着物か見たらわかるんだ、なかなかおもしろいのも集まつてゐるねと話してくれた。

商店街を通りかかった男性が原始感覚美術祭の本を見ててくれていたので話してみると、長野出身で信濃の国とあつたので懐かしくなつてと長野の話で盛り上がる。長野県民は県歌『信濃の国』をみんな歌えるよねと一緒に歌つてみたり。奈良では長野出身の人は少ないらしい。長野には関西圏から移住してくる人はかなり多い。

奈良で美術制作されている作家さんが立ち寄つて下さり話が弾む。展示の最終日に、音楽

とか一緒にやつてくれる地元の人を探していることを話すとすぐに電話してくれ、天理大学で民俗と身体表現を教えていたかたに繋げてくれた。わたしたちの活動をとてもおもしろがつてくださつて後日記録集を一式全て送ることを約束する。天理大学の雅樂部と一緒にやると良いかもと、繋げていだけることに。人の御縁ありがたい。

天理教のおつとめで来ているという方、パッチワークが好きで長年やつっていたのだけど、老眼になつてもうできないと諦めていたけれど、こんなふうに自由に縫つて良いならまたわたしもできますね！すごくいいもの見させてもらいました！ととても喜んで見ていてくれた。うれしい。

何回か様子を見に来てくださつてゐる方が草木染めのうつくしい糸を持つてきてくれた。とても良い色。八戸での制作のときもわたしたちのしていることを見て、本来は織りの経糸なんだけどもし使えるならと糸を持ってくれた方がいて、今回その糸もつかつて縫つてるんだけど、こうやつて材料を寄せてもらえるのは本当にうれしい。訪れる人に、この縫つてる糸はなんの糸ですか？と聞かれることがけつこう多い。わたしが中学校の時に着ていた木綿のセーターをほどいて縫い糸にしていると伝えると皆さんとても驚くし話が盛り上がる。太さも質感も着古した絶妙な色もたのしくて、もう着ない物から材料がうまれてくる。再利用の知恵つてこうやって女同士でお話しながら共有していくの、すごくいいかんじ。〈綾花〉



2023
11.21 火

絵の展示をしている英さん。緑色のひと。京都から奈良に越してきたそう。ものすごく鋭く厳しくいろんなものを見るなあとおもつて、展示会場の自己紹介のキヤブションを読んだらご自分でもそれが制作においての大切な部分だと書いてあった。これまではわたしの周りにはいなかつたタイプの人でとても新鮮、話すのがたのしい。これが京都独特の毒を孕んだ話術ですかすごい！と英さんに伝えたら、針で指すように気付かないようすにチクリチクリとするのが良いと話してくれた。数年後にある？つてなるような。細やかな視点と暗号のように毒を秘める頭の回転の速さがないとそんなふうに会話できない。やっぱ京都ってすごい。怖いけどおもしろい。お国柄というかそういうあるのはおもしろい、長野は山に囲まれてるからなのか閉鎖的なところがあると自分でも思うし。しかし関西圏の話術の凄さは本当に圧倒的だ。〈綾花〉

2023
11.22 水

石上神宮

みたまふり

石上神宮の鎮魂祭、祭りのような派手さのない行事なので、寒いし暗いしそんなにはいないかと思っていたが、地域の人がかなりたくさん集まって驚く。全ての電気が落とされて真っ暗ななか、蠟燭のちいさな灯りだけ。暗いなか息を呑んでかすかな音に耳を澄ます。はじめは、え？ つてくらい小さやかな声、全然聞こえない。それがすこしづつこしづつ単純な短い祝詞を幾度も繰り返すうちにようやく声が聞こえてくる。長い時間その場にいる人みんながじつと小さな音に耳を澄ます。途中風がぶわっとふいて木の葉がザザザザとざわめいて神さまが降りてきたみたいだった。音。目でみえている世界はうつつ、音からみえてくる世界は夢とのあわいにあるのかも。〈綾花〉

石上神宮の鎮魂祭にもあからがしらの布を持っていき、みたまふりの儀式の間も、布を縫い続けていた。その真っ暗の中、祝詞をあげている最中も手探りで縫い続ける。不規則な縫い跡が生まれる。〈杉原〉

2023
11.23 木

下部神社

吐山の太鼓踊りに行く。赤く染めたシデをよく見せてもらい、鉗がらで作れることを確認した。太鼓踊りは神社の木もれ日の秋の柔らかな光の中で行われていた。〈杉原〉



2023
11.26 日

天理駅南団体待合室
手縫いワークショップ

天理駅の団体待合所で手縫いワークショップ。勉強をしている学生さん、遊具できやあきやあ遊んでいるちいさなこどもたち、サラリーマンが打ち合わせをしてしたり、おじいちゃんがぼんやりしてしたり、色んな人が自然にこの場所に集つていてとても良い空間。天理市役所の人たちが行き交う人に声をかけてくれて沢山の人が興味をもつてくれて良い時間。コフフンの主のようなおじいさんが参加してくれたり、5人組のおばあちゃんたちがとつともたのしんで縫つたりお話したりしてくれて、最終日に文化村でこれを纏つて舞をすると伝えると、みたい！でもそこはバスがないから行きにくい！ととても残念がっていた。文化村は朝と夜の時間帯以外は予約制のバスだから、おばあちゃんにはハードルが高いようだつた。みんなで歩いて行くか！と話す姿もとてのもたのしそうで、本当にいい場所。〈綾花〉



2023
11.27 月

田村さんに僕の友達のつくっている素麺がおいしいので食べてみてくださいと三輪そうめんを一箱いただいた。これが本当においしくて驚いた。細くてつるんといくらでも食べたい。本物のそうめんってこんなにおいしいものだったのか。三輪そうめんすごい。〈綾花〉

2023
11.30 木

荒蒔町公民館
手縫いワークショップ

展示前の最後の仕上げに荒蒔町公民館で、あからがしらの体となる布に刺し子を施すワークショップを行う。荒蒔町の奥さんたちが自らの土地の行事と昔話をテーマにした作品制作に沢山参加してくれて、本当にありがたかった。当屋の奥さんに捧げものの料理と柳の木で箸を作るという話を聞いて、柳は川と繋がる重要な意味があると感じた。〈杉原〉

展示開始前日！連日深夜まで馬鹿みたいに縫いまくってる。こんなに全力でやり切らせてもらえる環境がありがたい。直前の手縫いワークショップで荒蒔町の女性陣と最後の仕上げとばかりにあいたところを縫う縫う縫う。もう布が大きな1枚にほぼ繋がっているからぎゅうぎゅうひしめき合って縫うからむちやくちや縫いにくくい！けど、お話をしながらたのしく縫う時間はあつという間。わたしは糸を通す係。皆さん手が早いのでどんどん糸を通してしまくる。やっぱりお母さんたちの手の力はすごい。話しながら手を動かしながら盛り上がる！やっぱたのしい！〈綾花〉



2023
12.1 金

文化村であからがしらの展示が始まったが、たくさんの着物が集まつたため、まだ着物の素材がたくさんあつたので、着物をほどいて、色と模様を組み合わせて大幕を縫う作業を夜中まで進める。そして文化村の1階エントランスホールのガラス窓に大幕を幾つか展示したが、道の駅に訪れるたくさんの人々の目にも入るし、夜はライトアップされて美しかつた。展示初日から毎日少しづつ、あからがしらの周りを覆う大幕も制作していく、あからがしらの布の刺し子も進んでいく。あからがしらの舞に向けて展示は成長していく。



38

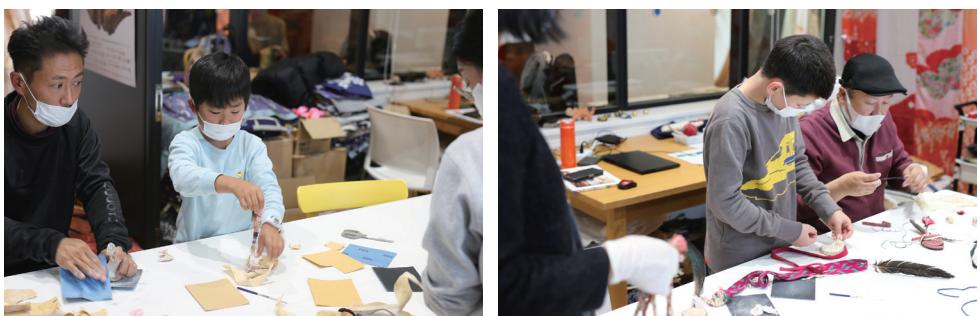
2023
12.2 土

お守りづくりワークショップ

おまもりづくりワークショップ

信夫貝釦製作所さんのご協力のおかげでものすごくたのしいワークショップになつた！やつぱり素敵な素材を前にするとみんな思い思いに自分で自分のかたちをひとりでに探していく。磨くひと、ぐるぐる巻きつける人、結ぶ人、たてる人。わたしは頼まれたら穴を開ける係をしてるだけなんだけど、素材を前に参加者が自分でどんどん探してく姿がとてもよかつた。いかに無駄な手出しをせずに見守るかが大切。

今回の素材『石上神宮で拾った鶴の羽・伊射奈岐神社で拾った白い羽根・着物の羽織紐・帯紐・貝ボタン抜いたあと廃棄される部分・糸・絹地・かんながら・鹿角』『綾花』



39

2023
12.3 日

勝手神社
山口神社

勝手神社のあからがしらの行事に参加させてもらう。古い写真資料では柳の箸は自然な曲がりがあったが、現在の柳の箸は、普通の箸の形に近かった。神饌の赤飯を頂いてきたので、1つは食べて、1つは冷凍しておいて、あからがしらの舞の際に捧げものとして使わせてもらった。文化村で音の確認後に、高田いのこの暴れ祭に行くが、祭壇を壊す部分は終わっており、子どもたちがお膳を叩き壊すところだけ見れた。お赤飯を盛りつけて3本の木の足がついた捧げものを持っていたが、この形がとても印象的だった。あからがしらも猪のイメージがあり、亥の子というのも、猪の子がたくさん生まれるので、多産の意味があり、子どもが打ち壊すというのも、あからがしらが野のものを食いつくしてしまったという破壊と繋がっているようと思う。農作物の収穫が終わり、一年の感謝をするときに、一度打ちこわして、美味しいものを皆で沢山食べて、多産と翌年の豊作を祈る習俗があり、洪水の起ころる地域ではそれがあからがしらの行事になつたのではないか。文化村に帰つて手縫いワークショップと、夜は幕の制作。（杉原）

2023
12.6 水

山の辺みずえ画廊
搬入

明日から桜井市の山の辺みずえ画廊で『みわのへび』の展示がはじまる。天理の『あからがしら』と同時に開催なので制作がめちゃくちゃハードだったけど、とてもたくさんの着物を託してくださった地域の方々のおかげで空間をダイナミックに美しく彩ることができた。本当にありがたい。桜井の展示は上ヶ道に建つ、その昔は紺屋を営み沢山の藍瓶が並んでいたという立派な古民家。田村さんに、運命の人と結ばれているという『赤い糸』のお話は『古事記』に記されている三輪山の物語から日本各地に広まつたことを伺い、一年に一度生え変わる再生の象徴である鹿角に赤い糸を膠で繋ぎ、染織屋を営んでいた船底天井の古民家の梁と繋ぎました。脱皮する蛇は縄文時代から、命を繋ぐ、生 - 性の象徴であり、再生のシンボル。帯は身体を結ぶもの。その帯をまるくまるく縫い繋ぎ、三輪山が蛇になるイメージをつくっていたのだけど、つくっていると、現れてきた形はなんだか臍の緒みたいだなとおもつたり。帯の中には文化村の歴史的建造物を修復している方々からいただいた「かんながら」と制作の中で出てきた糸屑を詰めた。大神神社の御神木の杉の木には蛇の神様がおられるそうですが、帯の蛇のなかには繊細でやわらかに削られた木が満たされて身体になり、鹿角を頭にして蛇のイメージができた。展示が見えてくるまでは不安そうにしていた田村さんも、展示が完成するとともに喜んでくださりご近所さんや道行く人に呼び掛けてくださりとてもうれしい。（綾花）



桜井市の山の辺みずえ画廊での展示『みわのへび』を見にきてくださった方とお話をす
るうちに「ぼくも獅子の囃子方をしています、うたも歌います」というお話になり、明日
12月9日の14時～のみずえ画廊での即興舞にうたで御参加いただけることに。
小関吉浩さんは桜井のご出身で、御杖村で獅子舞の囃子方や餅つき唄、伊勢道中唄な
ど地域の伝統芸能を継承されているそう。

元伊勢である檜原神社のある桜井で生まれ育った地元の方に、伊勢神楽の御札がかけ
られている展示会場である古民家山の辺みずえ画廊で御杖村桃俣の祝い唄である
『伊勢道中唄』をうたつていただけることに。不思議と紡がれてゆく御縁がとてもおも
しろくて、明日の本番がとてもたのしみ。〈綾花〉

原始感覚一座のメンバーも到着し、山の辺みずえ画廊の下見を行い、最後の追い込み
にあからがしらの布の刺し子と大幕縫いを夜中まで行う。〈杉原〉

2023
12.9 土

山の辺みずえ画廊
ピアノと即興の舞
搬出

山の辺みずえ画廊での公演は、昔、藍染の反物を洗つていた水路に入り、現在はわずか
な水量になった川の流れを足に纏い、小関さんの伊勢音頭に合わせて杉原が舞い、杉原
の鉦と中村の太鼓とともにつむらさひが舞い、黒田将行が蛇の面で舞い、そのあと安土
早紀子のピアノに合わせて、佐藤啓、杉原が舞い、佐々きみ菜の舞いで終わつた。〈杉原〉

明日、12月10日(日)の『あからがしらの舞』に天理大学の雅楽部の学生さんが、笙(しょ
う)、箆篥(ひちりき)、龍笛(りゅうてき)で参加してくださいになりました。

笙の音色は「天から差し込む光」、箆篥は「人の声」つまり「地上の音」、龍笛は天と地の間
を行き交う「龍の声」つまり天と地の間の空間を象徴しているのだそうです。

そして本日の桜井市の山の辺みずえ画廊での『みわのへび』即興舞にも参加してくれ
さつた太鼓打源五郎こと小関さんも、今日に続いて明日もうたつていただけることに。
『あからがしら』の展示場所である、なら歴史芸術文化村の芸術文化体験棟の3階ラウ
ンジ。明日は外へ続く大窓をすべて開き、内と外をひとつつなぎの大きな舞台にして『あ
からがしらの舞』を行います。



りなど、奈良県内のお祭りや伝統行事をたくさんまわらせていただきました。それらの土地に息づく表現から着想を得た即興の舞を行うことで、土地の記憶を蘇らせ、わすれたことをおもいだすこと。

着物という、大切なおもいや記憶を宿しながらも不要になつたものたちを、訪れる多くの人と《縫う》という行為が刻み込む、営みとまじないの力、その手の縫い跡に動かされるよう舞がうまれます。

今回の滞在制作で、たくさんの方々に託していただいたうつくしい着物が縫い繋がることで生まれた《あからがしら》は、奈良のそこここで目にした、どつしりとした大地の子宮のような古墳の姿、再生を願う母なるものの形のようです。洪水という破壊とともに土地に豊穣をもたらすものの象徴としての「あからがしら」を表現したいと思います。〈綾花〉

2023
12.10 火

あからがしらの舞

予想を越えて沢山集まつた着物を作品化するために展示が始まつてからも毎夜、大幕を縫い続け、公演のぎりぎりまで、バルコニーの外に幕を貼つたり、昆布とするめ、野菜と里芋に大豆をすり潰したものを持げるものとして料理したが、あからがしらに持げる柳の箸が手に入らなかつた。ネットで探して、大和郡山の市の木が柳であり、柳があることはわかつたが位置を特定できなかつた。原始感覚一座の仲間が泊めてもらつている友人宅と文化村の間に大和郡山市があつたので、柳の枝を探ってきてもらうように頼んだ。彼らはパフォーマンスの始まる1時間前に何とか柳の枝を探し出し、京都出身の佐藤啓くんが、「本番の2、3時間前に良い経験させてもらいましたわ」と、京都の言い回しを披露してくれた。そして、つむらさひは自転車で桃尾の滝に行つて柳の枝をとつてきてくれた。そのぎりぎりの時間から、啓くんは柳の枝を持つ舞が生まれ、佐々きさんは柳の枝を衣装にした舞を行い、杉原は柳の箸を咥えて舞い、あからがしらと繋がる表現が生まれた。この創造にかける一切の妥協のなさが、危機と紙一重な状況で即興を生み出していく。



せて、天理で頂いた着物を纏い村人をイメージした黒田将行の舞があり、安土早紀子の鉢と黒田の太鼓とともに、天理で提供してもらった衣装を纏ったつむらさひが舞った。そして天理で頂いた着物を纏った中村綾花が、鈴をつけた桜の枝を振りながら、みたまふりの祝詞をうたい、天理で頂いた大島紬の着物を纏った杉原信幸が、着物の大幕を揺らしながら現れ、柳の枝を咥えて舞い、あからがしらを纏い動き出すと、黒田があからがしらの捧げものを片付け、雅楽部の演奏と安土の太鼓とともに舞い、みたまふりをうたう中村の前で、シデのようななたてがみを振り、鹿角の牙を鳴らす。そして中村を飲み激しい太鼓とともに舞い、悶えるような舞いの後、頭を置いて杉原が去ると、村人役の黒田が現れ、お辞儀をしてあからがしらに捧げものをして終わった。「村人はこのようにしてあからがしらを祀りましたとさ」という昔話のような終わり方になった。何も決めていない即興によつて、物語が呼びだされた。そして公演後、見に来てくれた方が、桃尾の滝の奥で、あからがしらのような巨大な獣を見たことがある、ちょうどこんな感じだったという話をしてくれた。その後、インタビュー撮影を行い、展示の片付けを行つ。〈杉原〉



記録—展示・パフォーマンス

なら歴史芸術文化村

滞在アーティスト誘致交流事業文化村 AIR 成果発表展

「あからがしら」 杉原信幸 × 中村綾花

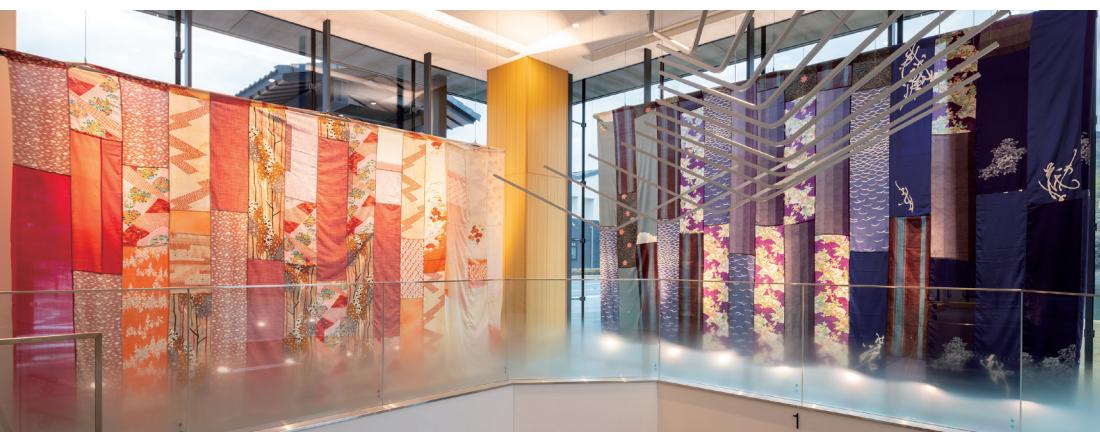
天理の昔ばなし『あからがしら』は、「あから」という獸が旧暦11月1日(12月1日)に岩屋町の山奥から姿を現し、郡山の額田部の方まで、川筋の野のものをすっかり食べ尽くしてしまったので、人々は「あから」が暴れないよう「あから」の頭をつくりお祀りをはじめたというお話です。

2か月間の滞在で「あからがしら」のリサーチを行い、そのような伝承が生まれた地域には、現在でも土壘の跡が残っており、洪水の記憶があることがわかりました。

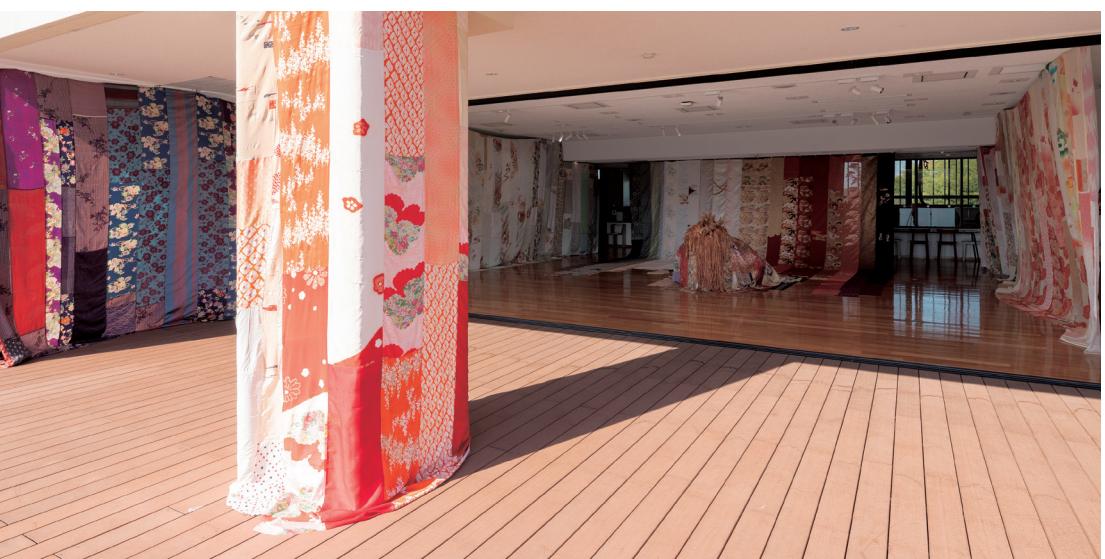
素材として天理市と桜井市を中心に不要になつた着物や帯などを地域の方々から提供して頂き、あからがしらの行事を現在も行つている勝手神社のある荒蒔町の公民館や天理駅南団体待合室、Art Space TARN、桜井市役所、なら歴史芸術文化村で手縫いワークショップを行い、地域の方と一緒に縫い繋ぐことで、「あからがしら」の体となる大布を縫い、夜都岐神社で頂いてきた古木から「あから」の頭を彫りあげ、鹿角と組み合わせ、奈良県文化財保存事務所から頂いた鉋がらを吉野の杉の葉で草木染をしたものを鼈にして、「あからがしら」を作りました。その周りには、たくさんさんの記憶を宿した美しい着物を繋いで大きな幕を作り、最終日の12月10日には、紅しで踊り、曾爾の獅子舞、石上神宮の御靈振りの儀式などから着想を得た即興の「あからがしらの舞」を行うことで、土地の記憶を蘇らせました。

リサーチ中に見た池に囲まれ、草の生い茂つた大地の子宮のような古墳の姿は再生への願いであり、着物という大切な記憶を宿しながら、不要になつた素材を、たくさんの人の縫うという行為によつて再生させ、その縫い跡に動かされるように、「あからがしら」が動き出す即興舞を長野県大町市で開催している「信濃の国原始感覚美術祭」のメンバーと共に行いました。今回の滞在制作で出会つた色鮮やかな美しい着物が集まることから生まれるもの。縫うという行為によつて宿る、営みとまじないの力、洪水という破壊とともに土地に豊穣をもたらすものの象徴としての「あからがしら」を表現しました。

Data	
会 場	なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟 3F 交流ラウンジ
展 示	「あからがしら」2023年12月1日(日)~12月10日(日)
パフォーマンス	「あからがしらの舞」2023年12月10日(日) 14時~15時
出 演 者	杉原信幸、中村綾花、安土早紀子、黒田将行、小関吉浩、佐々木み菜、佐藤啓、つむらさひ、天理大学雅楽部「吉澤救(笙)、川口喜一郎(篠篥)、藤山隆二(龍笛)」
素 材	古着物、帯、帶紐、糸、古木、鹿角、膠、杉の葉染めした鉋がら、竹
サ イ ズ	高さ約3メートル×幅約8メートル×奥行約8メートル











「みわのへび」 杉原信幸×中村綾花

学生時代に旅した沖縄の離島、大神島は、島民の全てが神を信じている島でした。

その三角錐の島の形と、大神神社の御神体である三輪山の形は同じ円錐形でした。

それはこの列島に暮らす祖先の旅した記憶と関係あるように思います。吉野裕子著

『蛇』に書かれるように、注連縄は蛇の交尾であり、山は蛇のとぐろのイメージです。

大神神社は本殿を持たず、拝殿のみがあり、三輪山の山と磐座がご神体である形は、沖縄の森のなかの聖域である御嶽と同じ、自然そのものを聖域とする古代の信仰の形態を残しています。三輪山の蛇神大物主の伝説には、運命の赤い糸の由来となる話があります。帯を繋いで円錐形を作り、帯の中に鉢がらと糸くずを詰めて蛇の体を作り、鹿角と繋いで、三輪山が蛇となるイメージを作りました。年に一度生え変わる再生の象徴である鹿角に赤い糸を膠で繋ぎ、染織屋を営んでいた船底天井の古民家の梁と繋ぎました。脱皮する蛇は縄文時代から、命を繋ぐ、生一性の象徴であり、再生のシンボルでもあります。

Data	
会場	山の辺みずえ画廊
展示	「みわのへび」 2023年12月7日(木)～12月9日(土)
パフォーマンス	「ピアノと即興舞」 2023年12月9日(土) 14時～15時
出演者	・安土早紀子(ピアノ)・黒田将行、小関吉浩、佐々きみ菜、佐藤啓、杉原信幸、つむらさひ、中村綾花
素材	帯、着物、糸、鹿角、膠、赤い糸、鉢がら





あからがしらと即興の祝いの縁の地としての奈良

杉原信幸

なら歴史芸術文化村から一番近い、夜都岐神社の境内で、古い切り株に目を惹かれた。そして普段は無人の神社に偶然、神主さんがいて、この木を彫つて作品を作りたいと伝えると、快く頂くことができた。土地の人もその切り株を見て、何かを感じて、焚くことはせずにずっと境内に残っていた。その朽ちた部分を削り落として、そのままの形があからがしらになった。

リサーチと制作の間の1か月間に、台北のレジデンスに參加したが、台北から近い宜蘭の道教の巫女のおばあさんが、接天宮200年祭のために玄天上帝の儀式を山に登つてやるから一緒に来てほしいと、コロナ禍で3年ぶりに台湾を訪れるちょうどのタイミングで夢を見たらしく連絡が来たので、儀式に参加してきた。この巫女さんは神の言葉を文字にするのが仕事で、台南の麻豆で古い煉瓦を使って船の作品を制作していた時に、何か間違いが起ころうとしているという夢を見て、わざわざ宜蘭からやってきて、

船の向きを変えてくれと頼まれて船の向きを変えたことが出会いだった。玄天上帝とは、ちょうど奈良に戻るタイミングでキトラ古墳の壁画の特別公開が行われており、予約したのが、玄武の壁画だった。玄武は蛇と亀が合体した精霊であり、参考館でも岩手の亀形土製品を見ていたこと、池に囲まれた西山古墳を見て、その草が見えるように風に靡く姿に、大地の子宮のイメージ、沖縄の龜甲墓と重なる再生のイメージを見ていたこと。そのようないくつかの出来事が、偶然が繋がりあって生まれてくるイメージは縁や理解を超えた必然性によって編みこまれ、立ち上がってきたのだと思う。

着物を提供してくれたおじいさんが、どんな活動なのか、しばらく様子を見てから、京都で呉服屋をやっていたお母さんが奈良に嫁にきて、持ってきたたくさんの着物を提供してくれた。そしてこの中に一着良い物があるから、着物のまま崩さずに使ってもらうか、そのまま売って活動資金

に来てくれた小関さんが、伊勢音頭の祝い唄をその場で歌つてくれて、画廊でのパフォーマンスにも参加してくれた。そしてあからがしらの舞でも伊勢音頭と御杖村の獅子の太鼓を叩いてくれたこと。T A R N ギャラリーでのワークショップに来てくれた恩田さんが元天理大学の小林さんを紹介してくれて、地元の共演者を探していると、天理大学雅楽部総監督の佐藤さんを紹介してくれて、雅楽部の学生が参加してくれることになったこと。それはさまざまな縁が編みこまれて生まれた奇跡的な場であった。この即興の祝いの縁こそが奈良に滞在してもつとも得難い体験であった。これからも奈良との縁が結ばれていくことを願つて、土地の精霊あからがしらを纏い様々な土地を旅していくきたいと思う。

にしてもらつても良いと言つてくれた。大島紬の呪術的な文様のある着物が一際目を引いた。その破れた裏地部分を少しだけ切り取つてあからがしらの布に縫い込んで、公演の時に纏つて舞つた。何をやるかは何も決めていなかつた。ただ、蛇口をひねり、水音を垂らし、文化村の前のため池に足を浸し、水を纏い、石上神宮の御靈振りの儀式のように、全てのライトを消した。そして着物の大幕に顔を押しつけながら、着物の幕の川の中を泳いで何かが近づいてくるようにな。

柳の箸を咥えて舞い、着物の記憶と、たくさんの人の手の痕跡の宿つた、あからがしらを纏い、たてがみを雨乞いのしで踊りのよう振る。水を乞うが降りすぎると洪水となつた土地の水の祈りの所作。宮大工さんの削つた鉋がらのシデが、濁流のように激しく、水の中にいるように、やらかく、舞い降りる。

神饌の話を聞かせてくれた野本さんが展示の感想をSNSで書いてくれたのを見て、山の辺みずえ画廊の展示

あからがしらのお話を辿つてゆく過程で、川沿いを歩き痕跡を探すなか印象的であったのは、伝統的な建物の民家の屋根の景色でした。ふつくらと船底のようなやわらかい曲线を描く瓦屋根、墀瓦の角には縁起物のお飾りが鎮座し、隣り合う人々の角で会話を交わすかのように恵比須様の向かい合う姿が見られたり、古びた銅の雨樋には美しい細工が施され、天からの恵みである雨に対する祈りのようなものを感じました。ダムや治水の途上であった時代には、奈良盆地は「日照り一番、水つき一番」といわれ、全国平均を大きく下回る年間降水量のなか必要な水の確保のために川を人工的に湾曲させ流水線を延長し勾配を緩める等してきましたため、土砂の堆積によって天井川となり、梅雨時や台風期には浸水常襲地帯が各地にみられた土地であつたそう。雨を乞うことと、川の増水による災害の身近にある土地で語り継がれてきたお話は、時を経て水の苦勞の記憶が遠ざかるとともに失われつつある、川への感謝や畏怖の記憶そのもののように思います。

あからがしらの通つた布留川は雨乞い信仰のある龍王山に源流を発し石上神宮のお山を抜けて盆地を潤す。そこに暮らすものにとって布留川は水や川の信仰と強く結びついたものであつたに違いありません。信仰としての布留川をたどるなかで石上神宮の鎮魂祭を見に行くと、全ての電気が消され小さな蠟燭の明かりの中で「ふるべゆらゆら

水害のない12月にあからがしらの祀りごとの行われることを不思議に思い調べてみると、『乙子の朔日』という風習が西日本にあり、これは12月の異名“乙子月”的いたち(朔日)に小豆餅や小豆飯といった赤色のハレの食べ物をつくり川に流したり川辺に供え水難を免れるという風習です。東日本では『川浸りの朔日』といって、赤飯を供え地域によっては河童に引かれぬよう尻を川に浸すといった水垢離に通ずることを行い、1年の最後の月の朔日に川の神を祀ることによつて水難をまぬがれるという風習が全国各地に残つてゐることを知りました。

とふるべ」と鈴の音と布留の言の祝詞が幾度も繰り返されます。暗いなか音に全ての感覚が集中し、言霊が空気をふるわせるような音のならびに夜都岐神社の神主さんが神様は音のようなものかもしれないとお話しして下さったことが重なり合います。石上神宮の鎮魂祭は魂を鎮めるのではなく“みたまふり”という魂を震わせ活性化させる御神事なのだそうです。元は太陽の力の最も弱まる冬至の前日の夜に行われていたそうで、太陽の力を蘇らせるための儀式であつたのだと思います。みたまふりの“振り動かすことによつて再生を促す”という所作は神社に参拝する時の鈴緒を振る所作や幣束を振る所作、神輿を振り起すことにも共通しています。それは自然界においても同じことで、月が満ちては欠けること、季節の移ろい巡ること、そして川の本来の姿も洪水で流路を変え振り動くことで肥沃な土壤が再生される。布留川の“ふるべ”とみたまふりの“振る”的重なり合うイメージに、袖を通されることもなくなり筆笥の中に眠つていた着物たちを地域の方々と繋ぎ合わせ、お話を聞きしながらひと針ひと針縫いあげた着物たちに宿るものを纏い動かすことでの魂を振り起すイ

メージが重なり合う。あからがしらを見つめることから川への畏怖や信仰、そしてこの地域の人々の纏つてきた着物にやどるものを振り起こし再生を祈るみたまふりのあからがしらの舞がうまれました。

3ヶ月間心身を捧げるよう布を縫いあげ、あからがしらの舞の即興のなかに身を任せた後に、公演をみてくださつた方が「桃尾の滝のずっと奥であからがしらを見たことがある」とお話をしてくれました。それまでは霞を掴むようになっていたものが、最後に答えあわせされたかのようで、公演の直前にどうしても仲間に頼み桃尾の滝(布留の滝)の奥から桜の枝を一枝手折ってきてもらい鈴を結わえて布留の言をおこなえたのも、あからがしらに呼び寄せられていましたかのように思えて、無意識に紡がれてゆく物語の不思議を感じました。

杉原信幸

1980年長野に生まれ、東京で育つ。2007年東京藝術大学大学院絵画科油画専攻修了。2010年より木崎湖畔を中心に「信濃の国原始感覚美術祭」を毎夏主催。2016年NPO法人原始感覚舎設立。理事長。2019年ACC(アジアン・カルチュラル・カウンシル)のフェローシップで8か月間の台湾原住民文化リサーチを行う。2021年北アルプス国際芸術祭2020-2021(長野)参加。2022年文化庁新進芸術家海外研修員として1年間、マレーシア、インドネシア、シンガポールの先住民調査を行う。

中村綾花

1982年沖縄に生まれ、長野で育つ。2004年信州大学農学部卒業。苺農家を経て、帽子作家として活動する。2018年クラフトフェアまつもと(長野)、2020年The Art of Transformation(国立工芸文化館、台湾)参加。

杉原信幸 × 中村綾花 インスタグラム

<https://www.instagram.com/nobuyukisugihara.ayakanakamura/>

杉原信幸 ホームページ

<https://sugiharanobuyuki.net/>

中村綾花 ホームページ

<https://ayaka-hatter.com/>



杉原信幸 × 中村綾花

生活と結びつく手仕事を行う帽子作家の中村綾花と美術家の杉原信幸のユニットです。

民俗、考古などの側面から土地の歴史や文化のリサーチを行い、土地の記憶の欠片を繋ぎ合わせることで、土地に宿っている形を造形化し、その創作行為から生まれる身体による即興の舞を行います。土地の文化を受け継ぎ、生活とアートが分けられる以前の豊かな精神性と身体性を蘇らせることで、生活と美しさとともに文化を呼び覚まします。わたしを超えて、地が語り始めること、それこそが表現です。

台湾、インドネシア、マレーシア、カナダと先住民のリサーチを続けることで、先住民が常に祖先と繋がる表現を行っていることに気づき、祖先との繋がりとは何かということを、自らのルーツとしての海の道、縄文文化を辿りながら、船、山、器、面などをテーマに様々な土地の文化を学びながら制作と考察を続けています。

2024年 Pier-2 Artist in Residence/Pier 2 Art Center駿二芸術特区/高雄、台湾

2023年 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR/なら歴史芸術文化村/奈良
祖先の道/Museum of Asian Art/クアラルンプール、マレーシア

2022年 RESS Midterms/Suantio Gallery/シンガポール
えんぶりえぼし、ゑぶりすり/はっちAIR2021/八戸ポータルミュージアムはっち/青森
うつろを編む/瑞雲庵における若手創造者支援事業・公益財団法人西枝財団助成/瑞雲庵/京都
鹿ん帽と鹿舞/UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川2022/三津間集落・石間家茶工場/静岡
巻藁船/ファン・デ・ナゴヤ美術展2022/名古屋市民ギャラリー矢田/愛知

2021年 懐裸の炬燵、ゆたん/高松アーティスト・イン・レジデンス2020/香川

2020年 ゆいぼーとAIR2020秋季招聘プログラム/新潟
東海岸大地芸術祭2020/台東、台湾
ストリートアートミュージアム/東京ミッドタウン/東京

2019年 東京ミッドタウンアワードアートコンペ優秀賞受賞/東京
成龍湿地国際環境芸術祭2019/雲林/台湾
紀の国トレイナート2019/和歌山

なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業 文化村AIR

ドキュメント2023

Bunkamura AIR Document 2023

編 集 高坂玲子／正木裕介(Gallery PARC)、北村良子(なら歴史芸術文化村)
Editors Reiko Kosaka／Yusuke Masaki (Gallery PARC),
Ryoko Kitamura(Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex)

執 筆 杉原信幸、中村綾花、なら歴史芸術文化村
Authour Nobuyuki Sugihara, Ayaka Nakamura,
Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex

撮 影 麦生田兵吾(合同会社ウミアック) [p.48-57, p.59-61]
Photographer Hyogo Mugyuda(umiak LLC.)

写真提供 杉原信幸×中村綾花 [p.3-6, p.8, p.10, p.12-16, p.18-22, p.25-28, p.30, p.31, p.34, p.35, p.39, p.40]
Photo なら歴史芸術文化村 [p.9, p.11, p.29, p.37]
Nobuyuki Sugihara, Ayaka Nakamura,
Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex

デザイン 安間仁美／刀根影吾(mondo)
Designer Hitomi Anma／Shogo Tone(mondo)

印刷・製本 株式会社 明新社
Printed and Meishinsha Co., Ltd.
Bound by

発 行 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会
Publisher Executive committee of Nara Prefecture Historical and
Artistic Culture Complex Bunkamura AIR

発行日 2024年3月20日
Published on March, 20, 2024

©2024 なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会
無断転載複写禁止

@2024 Executive committee of Nara Prefecture Historical and
Artistic Culture Complex Bunkamura AIR
All Rights Reserved.